

# 名取の自然堤防上 にある古墳

I-19

## ①天神塚古墳

名取市北部で旧名取川の河道が複雑に入り組む自然堤防上に位置する市ノ坪（上余田）に造られた古墳です。この古墳は、昭和55年に市教委が行った周溝確認調査により、東西23m、南北30m、現存する高さ2.8mで、まわりに舟の底の形をした周溝をもつ方墳であることがわかりました。壺形埴輪や大型壺形土器が出土しています。

I-19-①-a



I-19-①-b



I-19-①-c

# 被葬者の拡大 (=群集墳の出現)

I-20-①

6世紀頃になると、小さな古墳が群をなす「群集墳」があらわれます。これは、農業生産力の高まりとともに力を蓄えた新たな有力者のものと考えられています。  
この名取では、塞ノ窪古墳群が代表的な群集墳です。

I-20-①

## 塞ノ窪古墳群

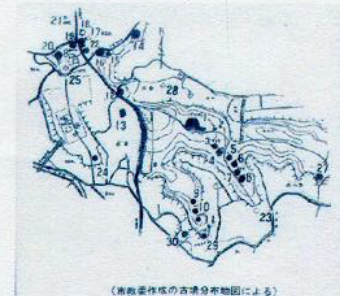
塞ノ窪古墳群は、笠島（かさじま）の丘陵上に位置し、小型前方後円墳の十石上（じゅういしのかみ）古墳（第17号）や第6、9、16号墳などを核にして、多くの小円墳が分布している群集墳です。塞ノ窪古墳群は、大型古墳から群集墳へと変化する時期につくられ、当地域に横穴式石室の伝わる前に終わりをむかえたと考えられています。

なお、この古墳群に混じるかたちで存在する大型前方後円墳の名取大塚山古墳と大型円墳の茂平塚、円墳の3号墳は群集墳がつけられる前の古墳と考えられています。

### 横穴式石室とは：

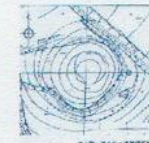
古い古墳では、たてに穴を掘った空間に遺体を埋葬しました。しかし、新しいこの時期になると、埋葬する部屋とそこまでの通路の天井が石でつくられるようになります。このように石で組んだ横穴状の埋葬施設が横穴式石室です。

I-20-②-a



(名取委作成の古墳分布地図による)

I-20-②-b



I-20-②-c



I-20-②-d